

パネル・ディスカッション

「 10年後の伊豆市のあるべき姿を考える 」

コーディネーター	伊豆市長	菊地 豊
パネラー	静岡産業大学 総合研究所所長 相模女子大学 学芸学部教授 伊豆市観光協会 伊豆市商工会	大坪 檀 氏 久保田 力 氏 長谷川 卓 氏 金刺 厚史 氏

市長 本日はパネル・ディスカッションのコーディネーターを務めます。よろしくお願いします。

これまでの6年間の市政では、辛く厳しい学校再編を進めただけでなく、修善寺駅改修や伊豆縦貫道整備促進などの明るい事業も進めました。伊豆市の現在の状況は先ほどの基調講演で話された夕張ほど厳しい財政状況ではないかもしれませんが、事業の見直しでは夕張市と同じようなことになり踏み込んでいます。これまでは予算削減の強い圧力はありませんでしたが、今後は合併市の厳しい状況が待ち受けているからです。事業の必要性には一切関係なく、総予算が減らされるのです。現時点での見積もりでは毎年13億円の歳出カットが必要で、これまでのやり方では伊豆市に未来はないということがはっきりとしています。私たち自身で新たな道を切り開いていくしか方法はありません。大幅な歳出カットを進めながら、若い人に住んでもらえるような元気な町づくりを進めなければなりません。

まず、パネリストの皆さんにこの難局に取り組むために大切なことは何か、市民と共有していかなくてはならない心構えなどについて伺いたいと思います。

久保田 相模女子大学の久保田です。住まいは清水町で、伊豆市のことはやや他人事として考えてしまっていますが、土地の者でない立場だからこそ見えるものもあるので、何らかの形でお役に立てるのではと思います。テーマ別セッション「次代を担う人づくり」の座長をお引き受けしました。

私が田方郡の高校に通っていた時には伊豆市はなく、友人も天城湯ヶ島町、中伊豆町、修善寺町から通ってきていました。ですから伊豆市に対するしっかりしたイメージを私自身が持っているわけではありません。

合併市にとってこれから暫くが正念場だということはよくわかりますが、それを見越した合併ではなかったのかとも考えます。合併するからには展望があったはずですが、この中・長期展望がはっきりしていないのが問題なのかもしれません。実際に伊豆市はでき上がってしまっているのですから、皆さんで知恵を出し合い、これから直面する難題を乗り越えていかなければならないでしょう。

基調講演での「一丸になって」という言葉は、私も大切だと思います。旧四町の中で修善寺がリーダーシップをとるのかもしれませんが、そのほかの旧三町の皆さんが伊豆市民としてどうコミット(参画)するか、そこで大切なのは一つの市としてのアイデンティティ(独自性、主体性)で、これ



がカギになるでしょう。

県西部の浜松市や中部の静岡市は政令指定都市、その一方で静岡県東部はバラバラでまとまれないでいます。伊豆市と伊豆の国市が隣り合っていたりするのも「まとまれない」文化の表れかもしれません。

私は清水町で生まれ育ちました。清水町は駿東郡の南端にありますが、駿東郡には他に小山町や長泉町があり、小山町は自衛隊、長泉町は企業で財政的に潤っています。そう考えると清水町は、周辺の沼津市や三島市に相手にしてもらえなさそうな寂しい町かもしれません(笑)。

そんな私は、田方郡の高校に通っていた関係

で伊豆にシンパシー(共感、好意)を持っていて、菊地市長が高校の後輩だったこともあり、何かのご縁を感じてこの役割を受けた次第です。

一巡目にまずお伝えしたいのは、伊豆市は「正々堂々と田舎と言おう」ということです。活気がある町にしたい人もいるでしょうが、活気があるというのは例えば、横浜や川崎であり、静岡県では静岡市や浜松市でしょう。そういう所と同じように伊豆市が「活気」という言葉を使っても不自然な感じがします。近隣で言えば沼津や三島でしょうが、残念ながら両市ともそれほど活気があるとはいえない状況です。伊豆市は、東部の核となる二市と比べてもさらに活気がなく、地理的にも交通の便で見ても、他と同じことができるはずはありません。ですから、私がこれから担当する「人づくり」セッションでは、逆の発想で、他の所と同じようなことをするのではなく、田舎であることを中心に据えた考え方をしようと思います。

市長からは、結論は出さなくてもいいと言われていています。このあと続く一連のセッションの中で、皆さんから出される色々な意見や議論の内容を参考にしながら、多方面の提案ができればと思っています。

長谷川 修善寺で旅館を営んでいる長谷川です。観光協会、旅館組合の観光関係者として出席しています。本日の趣旨は伊豆市がたいへん厳しい状況に置かれていることをまずは理解することだと認識しました。

観光についてはお手元の資料にあるように現在の伊豆市の宿泊者数は年間80万人で、10年前の100万人に比べると2割程度減少したことになります。伊豆市観光協会の活動の大きな財源は入湯税で、地域によって若干の違いがありますが、各施設で1人あたり150円くらいの入湯税をお客様から納めていただいています。この入湯税収入を市に納めて、その半分が各観光協会の活動に、残りが市の観光に関わる事業で使われています。

各観光協会といいましたが、合併して市になって10年が過ぎた現在でも、観光協会は旧4町に支部があってそれぞれが活動しています。4つの支部を1つにするという発想もありましたが、まとまりきれないのが現実です。旅館組合も4つの支部でそれぞれ活動しています。久保田先生が指摘されていたように、東部地区でもまとまれないのが実態です。これを観光客の側からみる



と、日本人であっても伊豆に行くのであって、伊豆市に来るわけではなく伊豆に来るという意識です。まして海外からの観光客は伊豆市だか伊豆の国市だか、どこだという認識をはっきり持っているわけではありません。海外に販促に行ったときに伊豆市から来たと伝えたと、昨日は伊豆の国市からプロモーションが来ていたといわれて先方が混乱してしまったことがありました。このようにエネルギーのロスがきわめて大きい、このことを常々感じています。残念ながら未だに考えていることと私たちの行動が一致していない、こ

れが現実です。

箱根には最近でもたくさんの観光客が訪れていて景気がいいと聞いていますし、実際にそのようにも感じます。箱根には、強羅、湯本、仙石原があってこれらが一体となった取り組みをしているのかという点も必ずしもそうではないでしょう。伊豆も外に向けて一体となるべきは一体となり、そして個々には個々にという形でやっていく、このような方法がいいのではないのでしょうか。

伊豆市のかけがえのない財産は「田舎らしい」ところだと考えています。このことは久保田先生も指摘されましたし、伊豆市観光関係者は皆さんほぼ同じ方向を向いていると思います。自然豊かなところ、都会化されていないところが伊豆市の財産で 10 年後もこういったところに磨きをかけていきたい、へんな近代化や都会化をさせない、このことが私たちの大切な仕事だという思いです。

ただ、その中でインフラ整備については良好な環境を構築すべきであると考えていて、伊豆市には最先端に近い情報通信インフラを整備してほしいと思います。現時点では各施設がそれぞれにフリーWiFi の接続を進めていますが、これを地域で進めるのが当面の伊豆市の課題です。諸外国に比べて情報通信整備が遅れていて無線通信が自由にできないのが日本の抱える大きな問題ですから、情報インフラの整備はどんどん進めるべきでしょう。また、交通アクセスがよくなっていることはたいへんいいことです。首都圏から 1 時間半くらいで到着できるので昼からでも日帰りで車で遊びに来ていただける、「ちょっと伊豆に遊びに行こうよ」という時代になりました。これは宿泊業にとっては厳しい面もあるのですが、多くの人に遊びに来ていただけるのはとてもありがたいことです。その中で伊豆市が持つ、この全体の田舎っぽい雰囲気は大切にしていきたい、へんな発展や都会化はさせない、このことが重要だと私自身は考えています。

金刺 皆さん、こんにちは。私は熊坂で屋根工事業を営んでいます。私は湯ヶ島で生まれたのですが、すぐに修善寺に引っ越したのでその時の記憶はなく、そのまま小中と修善寺で過ごしました。高校は伊豆総合に名前が変更された修善寺工業高校を卒業して、そのまま家業の瓦店を継ぎました。このように伊豆市から出たことがない、生まれも育ちも伊豆市という人間です。先ほどの基調講演からは、伊豆市ではすべてにおいて右肩下がりだということがわかりました。この点は 3 年くらい前から経営に携わるようになったことで私も実感しています。私の場合、商圏が富士川からこちら側の富士、富士宮、裾野、御殿場、三島、沼津で、伊豆半島では全域を回っています。この間、「景気が悪い」という話ばかりで、資金繰りにも毎年たいへん苦労しています。

これまで生活に追われていたこともあって、私にとって市政は他人事ではありませんでした。

この点は反省していて、今日の「未来づくりセッション」に参加をすることになって少しは勉強なくてはと考えると、今まで数回しか見たことがなかった伊豆市のインターネットのホームページを何回も見ました。第一次総合計画、後期計画、市民アンケートなど多くの資料に自分でアクセスできることをはじめて知りました。



これまでのお話を伺ってきて、市役所職員の方々も市民も思い切っここで変わっていくことが大切だと感じました。細かい提案はこの後に述べさせていただきますが、市民の私自身も真剣に考えていかなければならない、他人事では済まされない、まずはこうした理解が進んだことが今の感想です。

市長 金刺さんが指摘されたように、伊豆市ではこれまでたくさんの計画をつくり、たくさんのイベントを実施してきました。あとは実行することです。大坪先生、この点についてコメントをお願いします。

大坪 第一に今は難局ではなく、すごいチャンスだ、新しいことに取り組むのに好機だと考えることです。修善寺の地名はほとんどの日本人が知っていて、伊豆半島で修善寺といえば教科書にも出てくるほど有名な地名です。静岡空港の検討会では、県内の市でほとんど名前が知られていないところも多いのですが富士山と伊豆は海外でも多くの人を知っていることがわかっています。有名であることは伊豆市には大きなポテンシャル(潜在力)があるのですからこれをうまく活用することが出来るかにかかっています。次に、伝統とは創っていくものだという点も指摘しておきたいと思います。私は東京ディズニーランドをつくる前の検討会に参加した経験がありますが、ディズニーランドでは、何回も来たくなるように、リピーターを多くするように始めから設計していました。その検討会でも将来の人口減少の問題が指摘されましたが、リピーターを多くすればいいという結論に達しました。会場にもディズニーランドに 3 回以上行ったことがある人も多いでしょう。何回も来たくなる、伊豆もこうしたところにしなくてはならないのです。

市長 伊豆市では経済指標も観光も下がり続けていますが、この 20 年ほど日本が長期低迷にあって伊豆市よりずっと不利な立地にあっても全国から多くの人を集めて活気づいている市町もたくさんあります。首都圏からの立地も悪くない、潜在的魅力がある伊豆市が V 字回復する、伊豆の魅力を活用するカギについて伺います。

金刺 伊豆には、海があって山がある、そして狩野川があり、たくさんの魅力があります。市役所も含めてもう一度伊豆市の売りについて考え、売りがわかればそれをどう活用していくか、その方法についても考えていきたいと思います。市役所職員は 389 人いるとホームページにありましたが、これはかなりの数の職員で、企業でいえば大企業にも匹敵する数です。大企業には開発部がありますから、これと同じように市に開発部を組織して開発の役割を発達させる、こうしたチーム

を編成するのはどうでしょうか。そのときに、このチームを縦割りではなく横の軸で組織することが大切です。横割りでというのは、20代の職員と市民が意見交換する、30代、40代など年代ごとに検討を進めることで、若い人が伊豆市から流出するのが問題なのだったら実際のその年代の人達から意見を出してもらおうようにすることです。旧4町の各地域からもまんべんなく人が出て、自分たちが思っていることを述べてもらって、それを吸い上げる、一般市民を巻き込んで伊豆市を開発する組織がつくれればそれが活用するカギになると思います。

市長 年代横断的、それはいいですね。

長谷川 伊豆市の魅力は、首都圏からの近いところに、これだけ自然環境豊かな、人情味あふれる人々が暮らしている、歴史と文化のあるところが残っている、この現状が一番の財産であると私は常々思っています。さらに清流があります。水害対策の治水事業もありますが、自然の川の姿を強く意識した修正をしていく、徹底的に元に戻る、もともとの自然の世界を大切にすることが重要です。修善寺温泉の独鈷の湯では平成16年の大雨で大水害が起きたときに独鈷の湯の位置を少し動かして川底の安全対策を講じて安全性は確保されたのですが、その一方で温泉の泉質や埋蔵量に何らかの影響があったという話があります。工事の前にこの問題を懸念したお年寄りの意見もあったと聞いています。この話を聞いたときに、自然に対して人間はきわめて無力であるということを感じました。

一つ一つ修正すべきところは修正して良い方向に持っていきたいと思いますが、自然を守りつつよい環境をつくることです。住む人が幸せな地域ならばそこを訪れる人も幸せである、このことは全国共通ですから、伊豆市から外に出ていく人もいるかもしれませんが、この土地に流入してくる人が一人でも多く幸せに暮らしていける、こうした魅力ある町にしていきたいと思います。

市長 伊豆市にはお金、繁華街、スキー場がなく、繁華街とスキー場はなくてもいいのですが、お金がないところは人材でカバーできるとも考えています。この点についてはいかがでしょうか。

久保田 外部の人材を活用するという考え方もありますが、大坪先生が指摘された伊豆市のポテンシャルを考えると、この市の人材登用がカギだと思います。やれるのに動いていない人が多いようにも思います。この30年間右肩下がりのこの町を外から見ているのは、外に向かってアクションを起こすということができない、いいところを外に売らず自己満足で終わっているという問題です。田舎であることは決してマイナスではなく、田舎は田舎として、むしろ正々堂々と田舎であることを売るといったような商業活動やマーケティングを進めればいいのではないのでしょうか。言葉の使い方が良くないかもしれませんが、伊豆市は田舎です。都会だという人はいないでしょう。

清水町民の私から見ると、伊豆市は無理して合併したように見えます。修善寺、天城湯ヶ島、中伊豆にはそれぞれ違った歴史・伝統・文化がありますし、そこに山を越えて土肥が混じり込んでいて、土肥には土肥で下田・東伊豆・松崎・西伊豆などとの同族意識みたいなものがあって、伊豆市にはどこか、「どんづまり感」といったものを感じるのです。伊豆の国市が「伊豆のへそ」と名乗っているのに、橋を渡って伊豆市に入ると「日本一の富士の町」です。でもこれは、県内のどこでも使っているありきたりのキャッチフレーズです。裾野、御殿場、小山町など富士山がもっと大きく見える市が怒るのではないですか(笑)。こうした十把一絡げ的で当たり前の売り方ではな

く、もっと特徴のある言葉や標語を考え出していきっかけとして、例えば「栄えある田舎」といった表現を考えるのです。

私が専門とする教育や子育て支援の領域では、この田舎であることを逆手にとった実現の仕方が必ずあると思います。沼津や三島と同じことをするのが、伊豆市にとって本当にいいことなのか、冷静に考えてみてほしいのです。私は神奈川県にある大学教員をしています。神奈川には、園庭がない、園庭がアスファルトで固められた保育園も少なくありません。そこと比べると伊豆市の子どもたちの環境は本当に恵まれていて、たいへん羨ましいものです。そこを売れば、子どものための環境を考えて伊豆市に移住する人も出てくると思います。仕事面では難しい課題もありますが、子どもの環境を考えて住まいを移したがる人は必ずいるはずで

す。人口を増やそうというのであれば、若い人だけでなく中高年の人の移住を進めてもいいのではないのでしょうか。そういう人たちに住みやすい環境を作ることが必要です。先日テレビで見たのですが、畑と一緒に一軒家を貸し出す自治体もあるようで、これも面白い取り組みです。

具体的な提案はこれから示していきますが、私が考える伊豆市が活気づくためのカギは「栄光ある田舎」の売り方にあります。

市長 世界最高のNPOは日本の消防団であるという指摘もありますが、消防団活動や民生委員活動などから見て伊豆市にはまだまだ日本に誇れる地域力が残っていると思います。大坪先生、この地域力を活かすという観点からヒントをいただきたいと思います。

大坪 地域力はバラバラでは力を発揮できません。消防団だけでなく、青年会議所や商工会議所といった団体としてまとまって地域をよくしていかなければならないということで、アベノミクスの3本の矢でもバラバラでは力が発揮できません。地域力の原点は「10年後の伊豆市をどうしたいか」にあるので、グループを形成してそれぞれ書き出して各グループで分担して取り組んでいくことです。そのときに重要なのは目標が定まっていることで、自己中心的ではなく統一された問題意識のもとでいろいろ取り組んでみることです。また、時代の変化に対応するのではなく、理想を設計してそれに向かっていく未来設計論の方式がいいでしょう。さらにマーケティングを研究して町を発展させることもできます。



それでも最終的に歳出と歳入についての財政の問題が起きます。これからは国にも県にもお金がない時代になります。静岡県の行財政改革委員会の委員長を務めたときにわかったのが、県に1兆円、市町に合計で1兆円の借金があって、静岡県全体の借金は2兆円にも上ることでした。市町が持続的に発展するには、ある程度の歳出と歳入のバランスをとる必要があります。要は持続的発展と財政のバランスの問題なのです。

市長 現時点では伊豆市の財政はそれほどひどい状況ではありませんが、10年後には財政は確実に悪化します。今年はこの「未来づくりセッション」を開催して、10年後についてこれから1年

かけて考えていきたいと思います。

一人一人の個性を大事にするだけでなく、私自身は総合力を発揮することが重要であると考えています。多方面から指摘があったように、伊豆はまとまりがない、このことを私自身も実感していて、これは残念ながら伊豆市にもあてはまるのです。市役所は本来的に機能の作り方が縦割りの組織構造ですが、これに対して年代横断的なチームをつくってはという具体的なアイデアもいただきました。外郭団体など市の関係機関ではどの組織でも事務局機能の維持に苦労している現状があります。いわゆる区と呼ばれる自治会も、伊豆市には120を超える自治会があってこの枠組みの再検討も必要かもしれません。伊豆市内の行政や行政区を超えた総合力が求められると考えています。この点についてはいかがでしょうか。

長谷川 たいへん難しい問題ですね。先ほども申し上げましたが、観光関係機関でみても4つの支部があってそれぞれが事務局を持っています。一緒に取り組むということもできるのかもしれませんが、その一方でそれぞれの特質もあるのです。修善寺の観光マップ(地図)が日本一小さいとおしかりを受けましたが、それぞれの地域でもマップを作っています。一緒に大きいマップを作るとなると、私の想像力だけでは解決できないたいへんな難しさがあります。

確かにこの地に遊びに来る人は伊豆市や修善寺を意識してくるのではなく、伊豆方面というところから来の方がほとんどです。話は飛びますが、伊豆七島の大島で地震があったときに伊豆半島と混同されてお見舞いの電話を受けたことがありました。その程度の認識だということです。こうしたことから考えると、それぞれの地域の観光拠点として「伊豆箱根鉄道の修善寺駅から遊びに行ける観光地」という点で一致して活動することでしょうか。できるところから一つずつ行動に移さざるをえないとかねがね思ってきましたので、大坪先生が指摘されたように目標設定を明確にして進めていけばいいのではないかと考えています。

金刺 私は商工会からご参加しているので商工会の観点からみますと、商工会の会員数が減少していて非常に苦しい状態が続いていることがあります。数字でみると伊豆市の現会員数は1115件で、昨年は新規入会22件、脱会53件でした。脱会の理由では実は倒産は少なく、後継者不足や経営者の高齢化による廃業がほとんどなのです。伊豆市全体の問題につながるのかもしれませんが、商工会も疲弊が進んでいます。

商工会だけでなく先ほどから観光協会の方が指摘されたように、旧4町の枠組みがなくなると、これが合併後10年たった今でも残っています。これから先の取り組みについては、一丸となってやっていくように変わっていかなくてはならないので、自分の利益だけでは行き詰ってしまいます。事務局が遠くなるといったそれぞれの不便を納得して、どこまで我慢できるのか、です。経営者としての立場でも商工会の立場でも同じような問題があるのですが、大きい目標のもとであれば実行に移せるところもあるでしょう。議論を進めていってなんとか一丸となってやっていく、観念的・的確な表現ではないかもしれませんが、これがカギだろうと考えています。

先ほど指摘された消防団について一点追加します。分団レベルでは地区の壁もあるのですが、私が2-3年消防団の分団長を務めて他の地区の分団長の方と話す機会を持った経験から、それぞれの地区で若い人材が減っているという共通の問題があることがわかっています。このように問題によって、地域を超えた、地域をまたいだ分団の統合や再編を実現する必要があるかもしれません。

市長 個々の文化などを大切にしながら、その中で全体として総合力を発揮する、そのための方策について大坪先生いかがでしょうか。

大坪 10年後の目標の設定では、人口3万でいいのか、5万にするのか、といったように数値目標を明確にすることがまず大切です。大きな数値目標を設定すればイノベーション(革新)が起こります。実現しそうな目標設定ではイノベーションは起こりません。もう一つは、それぞれの人が伊豆市のために頑張ろうという郷土愛、盛り上がりが必要でしょう。

次に指摘できるのが地域社会はそこに住む人々によって形成されるということです。どういった人々に住んでほしいか、商店ではどういったお客さんを対象にするか、こうしたことを考えるのです。米国ボストンには良質の文化や芸術があってたくさんの文化人が集まってきました。イタリア・ミラノはルネッサンスが起こった生活水準がとても高い町で、文化・芸術を大切にしています。伊豆市は文化があって、日本の文学史にも歌にもでてくる天城湯ヶ島があります。文化面でのポテンシャルは十分にあるといえます。

市長 確かに総合力を発揮するとともに、地域がそれぞれ力を発揮する方法もあるかもしれませんね。これに対して縦の連携が指摘されるのが教育です。久保田先生、教育の観点から考えて地域全体を盛り上げる方法についてご意見をお聞かせください。

久保田 ご承知のように教育分野では、最近、幼小、小中、中高といった縦系列の連携が指摘されていて、縦の連携を進めるために従来の6・3・3制にも手をつけられようとしています。確かに縦の連携も重要かもしれませんが、教育は本質的にはその子にとって何がいいのかという問題であると私は考えています。

県東部地域では、伝統的に「上が何とかしてくれる」という意識が染みついているようです。それではチャンスは活かせないし、前に進むこともできません。静岡市や浜松市と比べてみれば「伊豆半島市」でもいい気もしますが、実現は無理でしょう。伊豆市でも今もって四町に分かれていると指摘されましたが、これまでずっと別の町だったわけですから、たった10年でその垣根を取り払うのは難しいのかもしれませんが、伊豆市としてまとまるにはまだ時間がかかるでしょう。とりあえずはそれぞれが頑張るという方策もあるかもしれませんが、その一方で伊豆市として合併したのですから伊豆市民としてのアイデンティティを確立することが重要でしょう。

教育面では、幼小でも小中でもどの段階でも、伊豆市が特色ある実践教育を展開する時に自分たちの伊豆市はいい所だと徹底して教えましょう。もち論、大人と一緒に「ええとこやんか、伊豆市！」を子どもたちに染み込ませていかななくてはなりません。

教育の他にも方法は色々あります。例えば、FM IS(エフエムイズ)の活用はどうでしょう。FM ISには「市民としてまとまろう！」という番組はありますか。具体的には、たとえば毎週各地域から一人ずつゲストとして市民を招き、「市長と伊豆市について語ろう」といった番組も有効かもしれません。コミュニティFMのいいところは地元密着型ですから、このFMを最大限活用して一般市民の関心を高めることを考えてなくてはなりません。具体的な話は今後続けましょう。

本日のセッションは、10年後をしっかりとした展望をもって語りましょうというせっかくの機会ですが、本来10年後を「自分の問題」として語るべき人たちが会場に少ないのが気になります。高

校生や若い人が会場にいないのは不安ですし、自分たちの伊豆市の 10 年後を真面目に論じようとする時に若い世代がなぜいないのか、私はとても不満です。せっかくこうした機会を作るのであれば、行政の方にも若い人が参加できる工夫をしてほしいのです。行政主導の会合の多くには、動員という情けない文化が日本にはあります。動員では、いくら人が集まっても駄目なのです。中学生や高校生では、大した発言はできないかもしれません。それでも、伊豆市について「こんなことを考えています」という小学生の発言を聞いた方が、そこから学ぶものが大きいのです。

伊豆市民としてのアイデンティティを作っていくための、パブリック・コメントなどもどんどん積極的に進め、市民を巻き込むための工夫をしてほしいと思います。先日、私が関わった神奈川県相模原市では、最初はなかなか応募者がいなかったのですが、社会教育委員の何人かを公募で選ぶ方法で市民を巻き込んでいます。「貴方の意見を聞きたい」という機会を積極的に作って発信していく、こうした市民の巻き込み方に、もっと工夫が必要でしょう。

高校生がいないのに、伊豆市の 10 年後を語るのはあまりに失礼ではないでしょうか。「君たちの町のことについて話すから、ちょっと来て知恵を貸してほしい」と市長から伝えてもいい。総合力を発揮するという観点から、こうした点についても考えています。

市長 ありがとうございます。10 年後の伊豆市の姿や理想を行政の長としての市長が決めることはできません。市民の代表としての自分の考えは提示させていただきますが、市民の皆さんで決めていただかなくてはならないのです。

この目標に到達するには(財政的には)とてつもなく厳しい道が控えています。市役所と学校以外のすべての施設、虹の郷、湯の国会館、天城ドーム、丸山スポーツ公園などすべての市の施設を廃止しても年間 2 億円しかならないからです。学校教育機関に対する予算は 1.6 億円で、



学校や幼稚園などをすべてを廃止することはありませんが、両方を合計しても 4 億円にもならない。現在の予算規模から 13 億円減らさなくてはならないといけないので、これにはとても追いつかないのです。この厳しい道を歩んでいくには、子どもを含めて主権者である市民の皆さんに決めてもらわなければなりません。本日が初回で今年はこのから 13 回のタウンミーティングも開催する計画で、こうした場を活用して目標設定していくことになります。最後に、市民自身が目標を設定するために、パネラーの皆さんに参考になる意見を一言ずついただけますか。先生方、どんなところであれば学生を連れてきたいとお考えになりますか。

大坪 私から言えるのは「日本のモデルになる」、これに尽きます。それには、生きがい、自然、歴史、文化、芸術があることです。モデルとしての姿がわかれば町の設計やたずまいはおのずと決まってくるでしょう。

久保田 私は、教育や子育てに自信を持っている所であれば、学生を連れてきたいです。歴史や自然はそこに住んでいる人間にとってはあまりにも身近すぎるので、わからないことも多いもの

です。私の清水町では、生まれた時から富士山が見えるので、その美しさがわからないまま育ってしまいます。大学進学で清水町から外に出た時、丹沢の山並みの間から富士山を見た時に初めて、富士山がきれいだと気づきました。伊豆市でも同じように自分たちで気づいていないいいところを探すところから始めてはどうでしょうか。

教育では、市が責任を負うのは義務教育段階までですが、たとえば伊豆市が特別な性格を持つ高校を作るのも一案です。市内の高校には伊豆総合高校と土肥高校がありますが、北に行けば伊豆中央高校や葎山高校などがあり、さらに三島には日大三島、三島北、三島南などがあります。ここで伊豆市が本当にいい教育を実践する、進学率もいい高校をつくることできれば、中学から三島方面の北にいつてしまう生徒を伊豆に踏み留ませることができるでしょう。荒唐無稽な話かもしれませんが、皆さんでそうした知恵を出し合っていくことが大事なのではないでしょうか。

大坪 教育については4年後にセンター試験が学習到達度試験に変更になるという大転換が予定されています。これにより日本の教育のあり方や考え方が根底から変わり、高校とは何かということも問われることになるでしょう。

市長 ありがとうございます。それでは長谷川さん、私と同じように第一当事者として修善寺のことについてご意見をお願いします。

長谷川 私は平成13年に修善寺に移住してきました。その経験から指摘できるこのよいところは、小学生が挨拶することです。突然移住してきた私に対して朝に会っても昼に会っても小学生が挨拶してくれるのです。これはすごいことで、私もそれ以来すれ違った人に挨拶するようにしています。こうした未だに残っているいいところを10年後も残していきたいと思います。それから、そう多くなくてもいいのですが、ここで暮らしたいと思ってそれなりの数の若い人が移住してくる、子どもを教育したいと思う町にしたい。伊豆には子どもたちが遊ぶ自然のグラウンドがあります。そして川遊びもできます。豊かな自然の環境の中で教育や子育てできる、そうした観光地でありたいと思っています。

市長 市長は提案して予算をつけることしかできないのですが、金刺さん世代には中心になって原動力として動いてもらわなければならないと考えています。市ができる環境整備、サポートについて助言やヒントをいただけますか。

金刺 先ほども言いかけたことですが、世代ごとの横のつながりをもっと強固なものにした方がいいと考えています。市役所の皆さんとのコミュニケーションをより一層強化するには「売り」を考える必要があります。商工会の立場からは農産物や海産物などがあるのですが、これらの売りについてもっともよく知っているのは毎日仕事で関わっている市役所の皆さんではないでしょうか。同年代の横のつながりをもとにして商工会やNPOといったグループがチームを作れば前向きな話も出てくることでしょう。子育てについては、まさに今子育てしている母親たちに集まってもらって情報交換する、消防団に参加しているのは20代30代の子育て世代の父親の集まりですからそこで話し合うこともできます。そして子ども達にも是非とも参加してほしいと思っています。そのときに市民だけでなく市役所職員が5-10人参加することが要点で、テーマごとに集まって話し合うの

もいいでしょう。私の大学生と高校生の子どもも一度くらいは参加させたいと思っています。

市長 私も青少年健全育成大会で、子どもの参加がないとお叱りを受けたことがあります。大会に子どもが参加できるようにと、先日職員に指示したばかりです。

最後に繰り返しになりますが、これから1年かけて「伊豆市の姿」をつくっていくことになります。市長として選ぶ政策は成功する確率が高いものを選びたいと思っています。プロ野球の試合でダブルプレーが欲しいときに、どんな球を投げれば内野ゴロで打ち取れるのか、という確率で、政策も同じようなところがあって(成功する)確率が高い政策を選びたいと考えています。そのときに誰を対象とする政策なのかについてよく考えたいと思います。教育であれば子育て中の若い母親世代が伊豆市を選んでくれる教育とはどういったものか、観光であればどのような町づくりをすればお客様が集まってくれるか、といった考え方です。そして一番高い確率の政策を選ぶ、これはどの分野の政策であっても共通だと私は考えています。そしてそれでも違った時にきちんと軌道修正できることも判断基準としたいと思います。行政は計画どおり進めましたとすることが多いのですが、修正できることも重要です。10年後の目標をしっかり作り、それを達成するために確率の高い政策を採用する、そしてそれが違ったときにうまく軌道修正することです。

この10年間は伊豆市にとって非常に厳しいのですが、平成32年度に予算編成ができて乗り越えられれば、その後は安定飛行できるのです。これから6年間は正念場なのです。6年間できちんとできれば安定した社会をつくることのできるのです。

本日の議論を皮切りに、専門の分野で先生方の意見も頂戴しながら、市民の皆様とともに将来像を作っていきたいと思っています。どうもありがとうございました。

